

実習報告（基盤教育実習）

## 社会的問題を対象とした教員と生徒が互いに学び合う授業づくり

三浦 未来（授業実践探究コース）

### 【探究実習のテーマと設定の理由】

現在の社会科教育は、受験という状況に埋め込まれている。それは中学校、高等学校でも同様だろう。受験に求められる社会科の学力は、暗記した知識によるテスト問題の解答に認められる。したがって、それを養うような教員主導による暗記型授業が展開されることが多かった。しかしながら、現在はそのような授業が見直され、生徒主体の授業、討論型の授業、学び合い学習など様々な授業スタイルが展開されてきている。

このようななか、「市民的アイデンティティ」の形成を意識するような社会科授業を行っていきたい。なぜなら、社会科の目標は「公民的資質の形成」であると同時に、生徒はすでに市民の一員だからである。そして、教員もまた市民の一員である。したがって、教員主導でも生徒主導でもなく、教員と生徒が互いに「市民アイデンティティ」を高めていけるような授業を開発したい。このような授業を開発するにあたり、以下の正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation) と二人称的アプローチ (Second Person Approach) の理論を援用する。

### 【探究実習の研究目標】

- ・授業や行事、1日の学校生活を通して生徒の実態を把握する。
- ・学習指導補助、授業実践、入試事務等を経験することにより、教員としてのスキルを身に付ける。
- ・授業実践を行い、市民的アイデンティティの形成、市民社会参加につながるような授業を実践する。

### 【探究実習の概要】

正統的周辺参加の理論では、実践共同体に参加することを学習とみなし、その学習効果はアイデンティティの形成と実践共同体への貢献である。実践共同体が維持・発展する過程のなかで、新参者(周辺の参加者)と古参者(十全的参加者)との間にコンフリクトが生じる。このコンフリクトを乗り越える手立てとして、二人称的アプローチが効果的に作用すると考える。二人称的アプローチは心理学で発達した最新の理論である。この理論の特徴を3点挙げると、①親密性、②対称性、③創発性とすることができる。この3点に着目してかかわり合うことにより、コンフリクトを乗り越えることが可能になると考える。

授業レベルで考えると、学校という実践共同体において、十全的参加者(古参者)は教員、周辺の参加者(新参者)は生徒である。たとえば、生徒が教員の意図とは異なる発言をしたとする。これはコンフリクトの発生と換言することができる。③創発性を期待するならば、生徒の発言を拾い上げ、新たな授業の流れを生むような行動を選択したい。そのためには、生徒が発言した内容からは表出しきれ

ていない生徒の思いを見抜く教員の洞察力が必要である。その洞察力は教員の経験から養われると考えるが、生徒との応答を続け、①親密性を築くことができているならば、経験の少ない教員も後者を選択できる余地は多少なりとも残っているのではないだろうか。また、教員が用意していた答えや考えが必ず正解とは限らない。社会的問題を授業で取り扱うとしたならば、なおさらである。生徒の思いがけないような発言に目を向けることにより、教員も学ぶことができる(②対称性)。これが「社会的問題をテーマとした教員と生徒が互いに学び合う授業づくり」につながる。

探究実習の1年目である基盤教育実習は、5月から事前学修を始め、9月には体育大会の練習・本番に参加、10月から週1回の実習をさせていただいた。実習の主な内容は、学習指導補助、授業分析、授業実践、教員の通常業務等である。授業だけでなく、給食、昼休み、授業の前後、放課後等を利用しながら生徒とコミュニケーションをとることに努め、それを実習記録や実習ノートに記述した。また授業実践は、歴史的分野「武士の世のおわり」、地理的分野「琵琶湖の水が支える京阪神大都市圏」、「古都奈良・京都と歴史的景観の保全」の3回実施した。このうち2回の授業ではワークシートに一言コメント欄を設け、授業の感想や教員への要望等を生徒に記してもらった。それを参考に授業の反省や生徒の実態調査に活かした。そして2月後半に、地理的分野「身近な地域の調査」を3時間実施する予定である。

### 【探究実習の成果と課題】

探究実習における成果の1つが、生徒との関係性の構築である。これまでの実習記録と実習ノートを振り返ると、実際に授業を担当した時の方が、生徒についての記録が多かった。これは、授業実践することでお互いどのような人間なのか知る機会が増えるからではないかと考える。学校現場に出たら朝の会、帰りの会、給食、掃除、行事など生徒と接する機会はより増えるだろう。しかし、それでもやはり「授業」という時間は、教員にとっても生徒にとっても互いに目と目を合わせ言葉を交わすことのできる大事な時間である。私は授業をするなかで、新しい生徒の一面を多く感じる事ができた。したがって、これを成果の一つとする。

一方で課題の1つが、授業実践である。前述した3回の授業では、理論を意識した授業づくりが実施できていない。たとえば、創発性を期待するような授業づくりである。生徒と教員が互いに「市民的アイデンティティ」を高めることを重視するならば、ワークシートの一言コメント欄を超えるような方法や手立てがあるはずである。したがって、今後は上田薫が紹介する座席表型指導案、全体の景色、カルテ、抽出児を二人称的アプローチで分析し、それらを改良をして授業開発を行いたい。

また、学校の実践共同体を超えて市民社会に参加し、市民と対話することにより、市民的アイデンティティの形成がより高まると考える。なぜなら、市民もまた複数の実践共同体に参加しており、そこでアイデンティティが形成されているため、様々な立場の市民の対話が予想されるからである。市民社会に参加することで、市民社会の発展にも貢献できる可能性がある。しかしながら、「身近な地域の調査」での授業は、市民との交流の時間を設けていないため、学校課題探究実習ではそれを補うようにしたい。